

だっこ

今生康宏

だっこ

「コー君！コー君！」

「……どした？」

唐突に俺の幼馴染……にして彼女が、ばんざいの体勢でぴこぴこ両手を振ってきた。思えばそう、さくらは昔から突飛な行動が多かった。感性が人と違うというか、どこかずれているというか。つまりは天然というか。

それが人の迷惑にはなっていないかと思いが、とりあえず俺にとっては理解不能な行動が多く、まあその度になんとなく気持ちを汲み取って理解し合えてきた自覚はある。ただ、今回ばかりはその行動の真意がわからなかった。

とはいえ、俺たちはもうただの友達から、彼氏彼女の関係になった訳だ。わからないと言っている俺なりにしようもない。

「ああ」

とりあえず、俺も同じようにぴこぴこさせてみた。

「ぶっ……！あははっ！コー君、なにそれー？」

いや、お前もしてることですがな。

さくらの真似をする俺がよっぽど滑稽だったのか、さくらは腹を抱えて笑い出した。こいつ、ちよいちよい俺には遠慮ないからな。

「コー君、コー君」

そしてまた、例のぴこぴこ運動に戻る。

さくらは色々とお断が多いとはいえ、もういい歳だ。自分が“女”であるという自覚もあるし、俺をハラハラさせてくれる機会は減っていたが、今日のぴこぴこはなんというか……結構激しく、胸が揺れてるんだよな。子どもがやってたら単純に可愛い行動だろうに、今のさくらがやると十二分にエロい。率直に言つて。

「あつ」

そして、ようやく気づけた。さくらは今、子どもじみたことをしているのだと。

「よい、しよつ……」

「ふわーっ、たかーい！」

脇の下に腕を潜り込ませ、さくらを持ち上げる。だつこという訳だ。胸はある癖にやたらとほつそいさくらは大した重さじゃないから、今でもちよつと俺が力を込めればしっかり持ち上げられる。……しかし、今更だっこか。

「お前なあ、なんでつたつていきなり」

「えへへっ、これでコー君と同じ目の高さだねー。コー君、でっかいんだもん」

「お前がちっこいの」

「えへへー」

さくらはなぜか照れくさそうに笑って。

それから……。

「んんっ!？」

「ちゅうっ……ちゆるっるううっ……ずっ、ちゆるっ……!あむちゅううっ……ちゅぱっ、ちゅずうっ、ずるるうっ、ちゆるっ、ちゅううっ……」

頭の中が真っ白になってしまっていた。

さくらは俺と見つめ合った、いきなり頭突きのように額をくつつけて来ると、そのまま唇を重ねてきた。

当然のように舌が俺の口の中に入れられて……。

「んむうっ……むちゅうっ、ちゅっ、ちゅぱっ、ちゅれろっ……んちゅっ!ふあー、おいしかったー」

「ジュース飲む感覚で人の口を舐めてくな」

「コーラの味だー。ノンカロリー?」

「きっちりレビューもしていくな。その通りだけど」

なんというか、さくら特有の謎行動が彼女バージョンになったことで、色々と危険度は上がった気がする。

俺は思う。つい最近まで童貞だった奴の弁だが、まあ一般論として聞いてほしい。

……恋人同士がそこまでピュアッピュアで、清いものだとはさすがに俺も思っていない。

とはいえ、キスをする時はお互いが合意か、それに近いぐらいまで情感が高まってからするもので、とりあえずだっこのからの不意打ちでやることじゃないだろう。俺はそう思う。そう断言していいと思う。

だが、さくらはそれをやる。平然と行動に移す。なぜか？さくらだからだ。

「なあ、さくら。こういうのはもつと雰囲気っていうか、せめて前置きをだな……」

「ちゃんと言ったよー？コー君と同じ目の高さになれたって」

「それは前置きって言わないんだ。一般人のレベルでは。拳を振りかぶる予備動作の後、目からビームを出すぐらい、予備動作として機能してない詐欺モーションだからな？」

「えー、なにそれー」

「お前の行動が俺以外相手だったら、クレームものだったってことだ」

「じゃあ、コー君だからいいよね！」

「……まあ、お前の訳わからなさを知ってるからな」

さくらはニコニコ笑っている。全く邪気のない、ただただ可愛らしい笑顔。……反則としか

言えない。

「私ねー、コー君とちゃんと目、あんまり合わせられてない気がしたの」

「まあ、身長違うからな」

「うん。コー君が私を見る時は、いつも下を向いてて、私は上を向いてるの。ちゃんと見てるつもりだけど、楽にして見るのは違うでしょ？だから、だっこなら普通に見えるなーって思っ

「はあ、なるほど」

「でね。目がちゃんと合ったらね」

さくらは少しだけ、顔を赤くする。

「したくなっちゃった。キス」

「……なあ、さくら」

「うん？」

「俺もたった今、お前としたくなっただけど、いいか？キス」

「いいよー。だっこしてー」

また手をぴこぴこさせて。

「仕方ないな。……よっ、と！」

「ふわー、たかいー」

「んっ……」

「ちゅうっ……ちゅぱちゅうっ……ちゆるじゅうっ……ずるちゅっ、ちゅぱっ……んまつ、ちゅっ、ずっ、ずるううっ……ふちゆるううっ……ちゆるちゅっ、ちゅれるううっ……ずっ、ずるうっ、れる、ぱちゅっ、ちゆるぶあっ……!」

さくらの舌使いは……俺が驚くほど激しく、情熱的に感じる。初めてした時からずっとそう
だ。

普段ほけーっとしてるさくらがどうして、と毎度思う。でも、きつとそういうものなんだろう。

「ちゅぱちゅううっ……!んるちゅっ、ちゅれるっ、ちゆるるううっ……ずっ、ずるるっ、ずるちゅっ、ちゅれぶうっ……んむちゅっ、ぢゅっ、ぱあああっ……!コー君、好き……」

「俺もだよ、さくら」

さくらは人と感性がずれていて、独特で。実は人よりも動物に近いんじゃないだろうか、とも思う。

俺だからさくらの言葉や行動をある程度は理解できるけど、他のやつとはそうもいかない。……だからきつと、自然と言葉よりも行動で気持ちを表そうとしている。

だから、さくらのキスはこんなにも情熱的で……好きっていう気持ち伝わるんだろう。

「コー君、コー君」

また地上に下ろした直後、さくらが手をびこびこさせてくる。

「……またか？」

「したいのー」

……これから先、キスの度にだっこしてたら、ジムに通うよりも腕の筋肉が付くだろうな、なんて思ったりした。

だっこ

2021年 8月11日 初版

奥 付

著者 今生康宏
URL <https://wedgewhite.com>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)